

報告

第5回日本リハビリテーション工学協会・全国頸髄損傷者連絡会合同シンポジウム —「生活の中での褥瘡」その向き合い方—に参加してきました

日本大学大学院 理工学研究科
博士後期課程 建築学専攻 植田 瑞昌

1. はじめに

「褥瘡が、私の時間と行動を奪った」当事者からのその一言が、建築を専門とする私にとって、とても衝撃的でした。2016年5月22日東京都練馬区立産業プラザ(ココネリホール)で行われたシンポジウムに参加してきました。参加者は、実行委員、出展者を合わせ170名を超え、大盛況でした。

2. シンポジウム内容

シンポジウムは、専門家や当事者からの報告とパネルディスカッションが行われ、会場内には、各企業から頸髄損傷者の生活に役立つ福祉機器・用具の展示紹介コーナーが設けられていました。

【専門家・当事者からの報告】

工学的な立場から、繁成剛氏(東洋大学ライフデザイン学部)より、座ることの難しさとその対応として、姿勢や目的に応じたシーティングのポイントについて話がありました。次に、当事者2人の体験談と褥瘡との向き合い方について話がありました。赤塚広明氏(大阪頸髄損傷者連絡会)からは、褥瘡を「無知の代償」とし、入退院や手術を繰り返す様子や絶望的な精神状態など、切実な話がありました。宮野秀樹氏(兵庫頸髄損傷者連絡会)からは、突然できた褥瘡に、忙しさのあまり病院に行かず、傷口を広げてしまった自らの過信が招く失敗談など、早期発見と早期治療の大切さについて話がありました。さらに、医療的な立場から、室岡陽子氏(東京慈恵会医科大学医学部看護学科)より褥瘡の成り立ちや判断の仕方について話があり、日頃からの皮膚観察

の大切さ、年齢とともに皮膚の状態も変わるといった専門的な話がありました。最後に、リハ専門職の立場から、廣瀬秀行氏(一般財団法人車椅子シーティング財団)より、褥瘡予防に必要なクッションや除圧手法について話がありました。

【パネルディスカッションと質疑応答】

「重症心身障害児・者への褥瘡配慮」「トランスファアの仕方」など、様々な質問が出され、うまく福祉機器・用具を活用することや予防の大切さなど、話は多方面に及びました。中でも興味深かったのは、「日常生活において車椅子に座らざるを得ない状況」について話が及んだことです。予防や早期治療が重要という反面、社会的責任という立場で葛藤しているということを知りました。



写真1 当日の様子

3. おわりに

褥瘡の知識や情報を当事者にどれだけ正確に伝えることができるか、そのために専門職ができることや人材育成の大切さ、また、社会参加や責任ある立場の時、褥瘡とどう向きあうか、学ぶことが多くあり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

日本大学大学院 理工学研究科
博士後期課程建築学専攻

〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14